八代集の「らむ」について

藤井茂博

古今集に始まって新古今集に終る八代集の変遷を探究する論は、従来いろいろの形で行なわれてきているが、まだこの問題は究明され尽されていないというのが正当であろう。実際、古今集と新古今集との間には、明かに質的相違が見てとれる。この変化の過程を助動詞「らむ」を基準にして考えようとするのが、この作業の目的である。では、なぜ助動詞「らむ」を基準に取ったかといえば、その理由には二つある。一つには「らむ」の使用されている和歌が、全歌数の一割以上の多きに上ることである。このことは、少数の実例をもって変遷を見るよりも、より妥当性の強いことが考えられる。今一つには、助動詞「らむ」が、他の助動詞に比較して、かなり知的要素を帯びていることである。すなわち、和歌の知的発想が、ある程度までさぐれることが予想される。以下は、これらについての試論の概略である。

一、助動詞「らむ」の機能と歌群分類

和歌文法は、古今集をもって一応確立を見たと考えて、まづ間違いない。古今集に継ぐ以後の勅撰集が、大体古今集を規範としていたことから考えても、また和歌文学が、伝統を守ろうとする姿勢でよまれていったことから考えても、和歌文法は、古今集以後ほとんど変化なく、固定したと見てよいであろう。それらの点を考慮した上で古今集に「らむ」の分類基準を求めた。

1. 「らむ」の説明

助動詞「らむ」の機能は、本来一つである。現在に関する事柄に対して、自己の判断を与えるという点ですべて一致する。全体的、または部分的であれ、不確実な点が存在する場合に「らむ」を用いて自己の判判断を与える。その判断が、いかに主観的である

か、また不確実であるかは、係助詞「や」を伴うことでも想像がつく。そして「や～らむ」の形式が古今集以後、和歌の一形式として継承されていったことに注目したい。

2．「らむ」の用法と歌群分類

和歌における「らむ」の用法は、形式からみて二つに大別される。一つは、推量が「らむ」の接続する用言に直接及ぶ場合と、他の一つは、明確な事実を表現する用言について、作者の主観をもって、その内容を推量する場合である。今前者を「一類らむ」、後者を「二類らむ」とする。内容から細別すると、「一類らむ」は更に二つに分類される。一つは眼前にない景を推量するものであり、他の一つは事実に対して作者が内容を解釈、もしくは理由を考えるものである。同様に「二類らむ」は、更に三つに分類される。第一には、明確な事実に対して作者の見解を展開するもの、（一類の後者とほぼ同じであるが、見解が先行するところが異なる。）第二には、部分的に不確実な点があり、疑問詞をもって推量するもの、第三には、従来最も問題にされているもので、疑問詞を挿入して解釈「主に原因・理由）する一群である。このように五つの群に分類される。

らむ
- 一類らむ
  - (A) 眼前にない景・又は人の心中を推量
  - (B) 事実に解釈を与えるもの
- 二類らむ
  - (A) 事実に解釈（理由）を与えるもの
  - (B) 疑問詞を伴って部分的に推量するもの
  - (C) 疑問詞が脱落したといわれるもの

以上のように分類すれば、分類できるが、各名の実例に当ってみると、その限界線は必ずしも明確でない。ただ、一類Aは連想に近いが、他の四つは、事柄の解釈・判断に力点があることに注目し、このことを後の作業の基準にする。

3．古今集の中から実例を示す。

(イ) 一類Aの例

霧たちて雁ぞなくなる片岡のあしたの原は紅葉しぬらむ

秋萩の花咲きにけりたかさごの尾上の鹿はいまや鳴くらむ

今もかも咲きにほふらむたちばなのこじまがさきの山吹の花

思い出でて恋しきときは初雁の鳴きてわたると人知るらめや

(ロ) 一類Bの例

なきわきる雁の涙や落ちつらむ物思ふ宿の萩の上の露

こふれども逢ふ夜のなきは忘れ草夢路にさへや生ひしげるらむ

(ハ) 二類Aの例

久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまさるらむ

秋のつゆいろいろことにおけばこそ山の木の葉のちぐさなるらめ

(ニ) 二類Bの例

白つゆの色はひとつをいかにして秋の木の葉をちぢにそむらむ

かが火にあらぬわが身のなぞもかく涙の川にうきてもゆらむ

(ホ) 二類Cの例

春の色の到り到らぬ里はあらじ○咲けるさかざる花のみゆらむ

別れてふことは色にもあらなくに○心にしみてわびしかるらむ

蜑の住む里のしるべにあらなくに○うらみむとのみ人のいふらむ

大空はこひしき人の形見かは○もの思ふ
ごとにながめらるらむ

（○のところに「どうして」・「なぜゆえに」などの語を入れて解釈する。）

〔注1〕「らむ」に伝聞の意味があるといわれているが、これは一類Aから派生したと解される。「らむ」に「とかいう」の意が本来あったのではなく、訳語の技術上のものである。

〔注2〕「らむ」の本来の意味（現在推量）が失なわれて「む」に近くなっている例が時代を下るにつれて多くなる。

〔注3〕二類Cの「らむ」は古今集中十七首ほどある。文法学者の間でも論議されているが、まだ定説を見ない。ただ、上句下句が逆説関係にある点では、一応一致する。今後の研究を持たねばならない。

二、八代集四季部の変遷について

八代集中で「らむ」が使用されている和歌の数をかぞえてみると表Ⅰのようになる。（多少見落しがあるかもしれないが。）

ここで注目したいことは、八代集においては、大体一割～一・五割ほど「らむ」の用例が見られ、固定化していることである。

		古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺	金葉集	詞花集	千載集	新古今	万葉
総歌数	総歌数	1111	1427	1357	1220	732	416	1188	1969	4516
	総らむ数	122	168	204	158	128	63	180	236	227
	%	11	12	15	13	17	15	16	12	5
四季部数	歌数	364	507	262	424	326	160	475	706	
	らむ数	55	70	51	56	69	28	87	91	
	%	15	14	19	13	21	18	18	11	
恋歌数	歌数	360	569	379	229	180	85	319	445	
	らむ数	39	59	47	23	20	8	30	40	
	%	11	10	13	10	17	9	9	9	

表Ⅰ

同時に、万葉集には少なく、新古今集でもかなり減少しているという事実である。しかしこの表だけではあまり漠然としているので、古今集に共通の部分立を持つ四季部と恋部に限定してみると表Ⅰの下部のようになる。率の高低に多少の変動はあるが、ほぼ総歌数の

		一類				二類					
		A		B		A		B		C	
	総数	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
古今集	55	15	27	9	16	13	23	13	23	5	9
後撰集	70	20	29	14	20	10	14	19	27	7	10
拾遺集	51	16	31	10	20	7	14	16	32	2	4
後拾遺集	56	22	40	19	32	3	5	12	21	0	0
金葉集	68	27	42	22	32	5	7	12	18	0	0
詞花集	28	9	32	7	25	3	11	9	32	0	0
千載集	87	33	37	25	28	9	10	17	19	3	3
新古今集	91	46	51	17	19	4	4	23	25	1	1

表Ⅱ 四季の歌と「らむ」との関係

率に一致し、いわば総歌数の縮少版たり得るのである。

今ここで四季部に限定して、前章の基準に従って分類してみると、表Ⅱのようになる。この表から結論づけることは早計であるが、八代集の変遷を考える一手がかりにはなり得よう。

(1) 古今集、後撰集、拾遺集のいわゆる三代集は、ほぼ古今集の系列を辿るもので、拾遺集あたりが、古今的世界の限界ではなかったか。(%がほゞ一致していることから)

(2) 拾遺集と後拾遺集との間には、和歌をよむ姿勢からも、時代間隔からも、明かに一線が引かれる。すなわち後拾遺集に至ってはじめて和歌は、転換期に入った。この頃から新古今集への萌芽が用意されはじめたと考えられる。

(3) 新古今集に近づくにつれて、一類Aの「らむ」か多くなっていることに注目したい。換言すれば、それだけ物を解釈するような態度を捨ててきたことを意味する。古今的世界と新古今的世界の相違を考える上での手がかりとなり得よう。

〔参考〕 参考までに、新古今に著しい傾向を見せる、純体言止の歌数率を調べてみた。

古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	詞花集	千載集	新古今集
$\frac{1}{20}$	$\frac{1}{25}$	$\frac{1}{13}$	$\frac{1}{9}$	$\frac{1}{8}$	$\frac{1}{8}$	$\frac{1}{5}$	$\frac{1}{3}$

表Ⅲ 名詞止歌数率（四季部）

この表から見ても三代集の世界から、新古今集の世界への変遷がある程度解せよう。拾遺集と　の間に区切のあることも理解できるのであるまいか。

（本学四年）